

平成30年6月7日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370948

研究課題名(和文) 模合(頼母子講)を支える交換文化：沖縄の都市と村落における交換に関する研究

研究課題名(英文) Rotating Savings and Credit Associations in Okinawan Society: An Anthropological Study of Exchange between City and Village

研究代表者

平野 美佐(野元美佐)(Hirano-Nomoto, Misa)

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授

研究者番号：40402383

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：沖縄県で盛んにおこなわれている庶民金融「模合(もあい)」について、現地調査や文献調査を行い、その文化的背景を交換の視点から明らかにした。沖縄県では、模合をはじめ、貨幣や物品等の交換(やりとり)が盛んである。その盛んな交換を支えているのは、多様で広いネットワークを形成、維持しようとする人びとの強い意志であり、模合や祝儀など「集まり」の仕組みであった。そのような「交換文化」は、経済的・社会的変化の影響をうけながらも、人びとの創意工夫により、現在まで発展的に継続されてきたのである。

研究成果の概要(英文)：I conducted on-site and literature surveys on the Rotating Savings and Credit Association (ROSCA), called Moai in Okinawa Prefecture, and clarified its cultural background from the perspective of exchange. Compared with mainland Japan, exchange of money, goods, etc. is very active in Okinawa. What supports this vigorous exchange is the will of the people whose intention it is to have diverse and wide networks, as well as celebrations and the "gathering" system that includes Moai. While economic and social change have influenced this culture for a long time, it is the effort and creativity of the people that sustains this exchange culture to the present day.

研究分野：文化人類学

キーワード：貨幣 交換 沖縄 模合 祝儀

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、平成 23 年度より、沖縄県で「模合(もあい)」の調査・研究を行ってきた。模合とは、かつて日本全国でみられた「頼母子講(無尽)」と同様の、沖縄における庶民金融である。かつては日本の津々浦々まで広がっていた頼母子講や無尽は、金融機関の発展などもあり、大きいものは銀行などに姿を変え、小さいものの多くは、徐々に姿を消した。しかし沖縄県だけは例外で、現在でも模合は、広く活発に行われている。

統計によれば、沖縄県の成人の約 2 人に 1 人が、多くの場合月に一度、同級生や友人・知人らと模合を行っている。模合の集会はかつて、模合メンバーの家などで行われていたが、現在は飲食店などで、飲食をともにしながら行われることが多い。模合メンバーは集会ごとに、各自が現金を持ち寄る。1 人が出資する金額は、たいてい 1 万円程度である。12 人前後で行われることが多く、一年に一度、全員が順番に 12 万円程度を受け取る計算となる。ほとんどの場合、利子は付かない。

このような 1 万円程度の模合は、メンバー同士の親睦を深めることが第一の目的とされ、「親睦模合」などと呼ばれる。模合は金融の仕組みであるが、金融機関が発展し、社会が豊かになった現在、現金を集めて貸し付けることが目的ではなく、定期的に気の合った仲間が集まるのが、最大の目的というわけである(金融目的のより高額な模合もなくなったわけではない)。人びとといわく、「定期的に集まろう」というだけでは、みな忙しく、なかなか集まらない。模合にすることで、支払い義務が発生し、定期的に集まるのが可能になる、という。

このような親睦模合グループは、現金をやりとりするだけでなく、おしゃべりを通じた情報交換や、メンバーが困ったときには援助をするなど、小さなコミュニティの役割を果たしている。つまり、多くの模合に参加すれば、さまざまな人脈と安心が得られる。沖縄は、このような無数の模合ネットワークが張り巡らされており、よくいわれるように、模合社会なのである。

このように、本土ではすでに廃れてしまった模合(頼母子講)は、沖縄県において、その性質を変えながらも、今なお重要な組織として存在している。

では沖縄県でのみ、今なお活発に模合が行われているのはなぜなのだろうか。現在まで、沖縄の模合はどのように発展し、また何がそれを支えてきたのだろうか。本研究は、そのような素朴ともいえる疑問に端を発している。

2. 研究の目的

本研究は、沖縄県で活発に行われている模合を、より広い「交換文化」という文脈のな

かで考察する。なぜなら模合は、単なる金融の仕組みではなく、さまざまなものが交換される装置でもあるからである。

模合でもっとも目立つのは、貨幣の交換である。模合の集会では、毎回現金を集めてメンバーに順番に貸し付ける。模合を全体の流れで見れば、全メンバーで貨幣を交換し合っていることになる。しかし、模合で交換されるのはそれだけではない。模合の集会では、飲食を共にしながら、話をする。そこでは、さまざまな情報が交換され、相談ごとを持ち込まれる。模合は「ユイマール(相互扶助)」だといわれるが、単に金銭の融通を行うというだけでなく、模合グループそのものが相互扶助組織となり、メンバー同士の多種多様な助け合いが行われている。

また模合グループは、同級生模合がそうであるように、高校を卒業後に形成され、何十年も継続されることも珍しくない。集会の時間は毎月数時間であっても、その長期の積み重ねによって、信頼という感情が生まれ、交換されているのである。

しかし、模合グループを継続するのは簡単ではない。子育てや介護などでグループをやめるメンバーがいたりする。決められたときに模合金を支払わないメンバーは、排除しなければならない。メンバーが多少入れ替わりながらも、長く続けるためには、グループとしての工夫や努力がいる。

また、模合メンバーに必要である「交換」に対してのオープンな姿勢(ハビトゥスのようなもの)は、一日で身につくわけではない。「模合をやろう」「模合を継続しよう」という意図をもつ人びとを再生産しているのは、模合以外の場所でも頻繁に行われるさまざまな交換の実践なのであり、それを当たり前とする沖縄社会なのである。

一方、沖縄といっても地域差や世代差、個人差がある。本土からの移住者も多い。沖縄に暮らしているからといって、誰もが当たり前模合を行うわけではない。とくに、都市部と村落部においては、模合を支える交換文化に差異があると考えられる。

よって本研究では、沖縄県都市部の中心である那覇市と、模合が県内で最も活発といわれる宮古島という周辺(村落)部において、交換文化に関する調査、研究を行った。それぞれの社会で、模合をはじめとする交換がどのように行われ、その交換を通じていかなる社会関係が結ばれているのか。また現在に至るまで、その交換文化はどのように継承、発展してきたのだろうか。つまり、本研究の目的は、沖縄県における、模合を支える交換文化の現在と過去を明らかにすることである。それは、現代沖縄社会の基層文化を明らかにすることにもつながると考える。また、沖縄でのみ模合が活発な理由と、日本の他地域が頼母子講を失った原因とその再生可能性をも明らかにできると考える。

3. 研究の方法

本研究の方法は主に、沖縄本島と宮古島における参与観察、聞き取り調査、文献調査、資料調査である。とくに、下記のA.B.C.の3つの交換に着目しながら、それぞれの方法で調査を行った。

A. 模合関連の交換：まず、模合関連の交換に焦点をあて、沖縄本島的那覇周辺地域と宮古島において、模合の集会の場で行われる交換(貨幣、会話、感情等)について、参与観察、聞き取り調査を行った。また、集会の場以外での模合メンバーとの交流(海岸でのバーベキューパーティーである「ビーチパーティー」などのイベントや旅行)、モノの交換などについても聞き取りや参与観察を行った。また、SNSなど、模合メンバー同士が交流に活用しているインターネット上の情報も閲覧、参照した。また、模合グループが記録している模合帳の収集、分析を行った。文献調査としては、宮古島市立北図書館、沖縄県立図書館、国立国会図書館などにおける、書籍や論文の収集、分析に加え、『宮古毎日新聞』等から模合の記事を収集し、分析を行った。

B. 日常生活での交換：模合メンバー以外の人(家族、友人・知人、同僚、隣人など)との日常的な交換について知るため、聞き取り調査や記録の収集、資料調査を行った。たとえば、複数人に、ひと月のモノのやりとりとその相手、理由を記録してもらい、分析を行った。また、家庭の贈答記録や家計簿を見せてもらい、日常生活における交換の傾向を分析した。また、旧盆や旧正月など、年中行事でのモノのやり取りについて、聞き取り調査、参与観察を行った。加えて、新聞から、日常生活における交換に関する記事を収集、分析した。

C. 人生での交換：沖縄県では、本土にはないさまざまな人生の通過儀礼やお祝いごとがある。結婚式や葬儀などの本土と共通のものもあるが、結婚式の規模は本土に比べれば大きく、また、葬儀後の行事も、本土より数が多い。そのような祝儀、不祝儀について、人びとが記録している祝儀帳や不祝儀帳を見せてもらい、それに関して聞き取りを行った。また、子どもや老人に関連した祝儀に参加し、参与観察、聞き取り調査、モノや現金のやり取りを記録した。資料調査としては、新聞記事や書籍を収集し、祝儀・不祝儀における交換についての過去の方法を分析し、現在に至るまでの変化をたどった。

以上のように、交換を三つの種類に分けて分析することで、沖縄における交換文化を多面的に研究・調査することができたと考えている。また、現地調査や文献調査などさまざま

な資料を用いて分析することで、クロスチェックを心がけた。

4. 研究成果

沖縄本島と宮古島は、それぞれ別の歴史をたどってきたが、共通点も多くある。それが、模合や人生の通過儀礼の活発さであり、交換文化の存在である。研究の方法でも示したように、まず、3つの交換に沿って、調査結果を示していきたい。

A. 模合関連の交換：模合メンバーは、模合の場で貨幣以外にも、感情、情報を交換していた。メンバーが苦境にあれば、それに共感したり、励ましたりする。困ったことを相談すれば、所属する模合メンバーからだけでなく、そのメンバーが所属する別の模合メンバーまで動員して、解決が図られることもあった。長い歴史をもつ模合のメンバーは、家族ぐるみの付き合いをしており、メンバー家族の祝儀・不祝儀には、みなが駆けつける。メンバーは喜びや悲しみを分かち合い、貨幣(お祝い・香典など)を交換する。

宮古島では、模合メンバーで旅行積立を行い、メンバーやその家族もともに、旅行に出かけることも多い。那覇の模合では、年に一度、家族ぐるみでビーチパーティーなどのイベントを行ったりする。また、同級生の模合グループは、各地にちらばったほかの同級生模合グループと情報交換し、年に一度、グループがいくつか合同で、同窓会を行ったりしている。また、宮古島出身者の同級生グループは、自分たちで還暦祝いの旅行を企画し、積み立てをしていることもある。また、とくに那覇などの都市部では、老年層以外は、模合メンバーとTwitterやFacebookなどSNSを通じてコミュニケーションをとっていることが多い。都市部になると、顔を突き合わせる付き合いは、集会での月一回になりがちだが、SNSを介して、より頻繁な情報交換が可能となっているのである。

このように、模合は単なる金融組織ではなく、人を組織化し、密な人間関係を形成する仕組み、きっかけとなっている。そこにあるのは、上記のようなさまざまな交換である。

また、模合グループから派生して、模合グループ以外の人のために、その活動が広がることもある。例えば宮古島では、女性の同級生模合のメンバーが、NPO法人を立ち上げ、生まれ育った地域のお年寄りを支える活動を行っている。また、模合で募金活動をし、途上国に送金しているグループもある。このように、模合グループは、メンバー同士で助け合ったり楽しんだりするだけでなく、外部の人にも影響を与えることもある。しかしそれを可能にしているのは、模合金の支払い義務によって定期的に顔を合わせ、会話をし、情報交換を行ってきたことの、長年の信頼関係なのである。

また、文献調査や聞き取り調査などから、模合の活発化は、農村の貨幣経済化と密接に連動していることがわかった。かつての茅模合やコメ模合のように、貨幣以外のものを持ち寄った時代もある。しかし、多くの農家が、自給作物ではなくサトウキビという換金作物を作るようになって以降、貨幣で食料を買うようになり、貨幣での模合が一般的になってきたことがわかった。その貨幣経済化は、沖縄本島よりも宮古島において遅く、また宮古島でも地域差があることがわかった。

また、沖縄で模合が今も活発なのは、沖縄の人びとが、金融目的から親睦目的へと積極的にシフトさせてきたからであることもわかった。金融目的であれば、本土のように、簡単に金融機関にとって代わられる。しかし、戦後の苛烈な時期を模合で乗り切った後は、それを親睦の組織に変えた。模合を介して確実に集まろうとする人びとの意志と工夫が、沖縄だけに模合を存続せしめたのである。

B. 日常生活での交換：沖縄県では、模合という貨幣の交換以外に、日常生活における交換も活発である。交換相手は、模合のメンバー同士はもちろんのこと、近隣の知人、友人、同僚、県外の親戚など広範囲にわたっていた。調査の結果、とくに宮古島においては、農作物や海産物などの食料や、子どもへのちょっとした小遣いなどが、多くやり取りされていた。個人差もあるが、多い人ではほぼ毎日、誰かと何かをやりとりしていた。また、宮古島では、自分の子どもなどが沖縄本島や本土に移住していることが当たり前となり、それらの親族と、頻りに金品を送り合っていることが明らかになった。

また、宮古島も含め、沖縄県ではお年玉をあげる子どもの範囲がかなり広く、毎年この時期の金策に悩む人が多いこともわかった。この場合、子どもとの交換ではなく、親同士の付き合いとしての交換と考えられる。本島では、旧盆や旧正月にも、親戚などでさまざまな金品がやりとりされていることもわかった。宮古島では主に新正月を祝うが、年末年始は子ども家族や孫が帰省するため、多くの物品がやりとりされることもわかった。

C. 人生での交換：

沖縄県では、生年祝いなど、本土よりも頻りに、盛大に、人生の通過儀礼を祝う傾向がある。とくに宮古島ではその祝儀が盛大である。

宮古島では、子供の通過儀礼の祝儀として、名づけ祝い、小学校入学祝い、高校入学祝い、成人式と、子ども1人につき4回、盛大に行われる。祝いは招待ではなく、友人、同僚、親戚が、子どもの祝儀の年を把握しており、「勝手に」家にやってくる。祝い家では一晩中、入れ代わり立ち代わりやって来る数十人の、ときには100人を超える客をご馳走でもてなす。出席する側は現金を祝儀として用意

する。返礼は、スーパーなどの商品券の半返しである。商品券をもらった側は、再びそれを誰かに贈答するなど、2次交換があることもわかった。

このような現金と商品券の交換は、最近成立した形である。というのも、かつての返礼品は商品券ではなく、コメやケーキなどの食料品であった。さらに文献や聞き取りで過去を遡れば、祝儀の品自体も現金ではなく、豆腐やコメなどが用いられてきた。しかし、サトウキビを売って食料を購入するという事態が起こり、貨幣が社会に多く流入するに至って、祝儀の品も貨幣へと変わっていったことになる。

また、貨幣化すると同時に、戦後豊かになった沖縄社会は、祝儀が活発に行われるようになってきている。聞き取りによれば、戦前や戦後すぐは、子どもの祝儀はとてつもなく簡素であったという。

経済的な理由以外もある。宮古島での子どもの祝儀が盛んになったのは、高校卒業後の10代後半から20代の若者たちが、進学や就職のためにこぞって離島するようになって以降である。大学も専門学校もない宮古島から、子どもはいつか出ていく。そして二度と島で暮らさないかもしれない。だからできるだけ盛大に何度も祝ってやりたい。そういう親心が、子どもの祝儀を盛んにさせたのである。交換の様式の変化は、経済的な変化だけでなく、社会的な変化によっても大きく影響を及ぼすのである。

以上の研究結果から、沖縄県の基層文化ともいえる「交換文化」についてまとめてみたい。

模合の背景には、普段から沖縄社会のなかで、多くの交換が繰り広げられていることがわかった。多くの人と、情報、カネ、モノ、労力を交換、共有するという「ハビトゥス」が広く培われている。そのハビトゥスがなければ、これらの交換文化は成立しえない。では、このハビトゥスはどのように培われるのかといえば、毎日のやり取り、もったりあげたりという交換の実践である。また、模合に関していえば、小さい頃から親の模合について行き、一緒に楽しむ子どもも多く、「自分も大人になれば模合をやる」、と楽しみにする子どももいる。いわば、再生産である。

日本、とくに都会では、コミュニティが縮小し続けているといわれる。那覇のような都市部でも、多かれ少なかれ、事情は同じである。本土からの流入者も多く、地域によっては周辺住民との付き合いも限られている。しかし、それを補うのが模合である。面としてのコミュニティは失われても、模合を複数掛け持ちすれば、ネットワーク型のコミュニティの網の目のなかでいることが可能になる。これは、都会でのセーフティネットにもなりうるのである（たとえば、老人の模合グループでは、模合金のやり取りのなかで、家族よ

りも先に、模合メンバーが認知症の発症に気づくこともあるという)。

宮古島では、そのコミュニティが目に見える形で現れるのが、祝儀の場面である。そこでの大々的な交換は、廃れるどころか派手になっているともいえる。宮古島における交換の根強さは、戦後まもなくから、何度も「生活改善運動」の対象となってきたことからもうかがえる。新聞には、お返しをやめよう、祝儀を減らそう、という記事が繰り返し現れている。しかし現在に至るまで、宮古島での交換は衰えていない。この交換の「レジリエンス」は、日常の交換や模合の実践により、支えられているのである。

このように、沖縄県の交換文化は、経済的社会的変化や制約のなかで、人びとによって、維持され、発展してきた。その交換文化を支えてきたのは、多様で広いネットワークを形成、維持しようとする人々の強い意志と創意工夫である。決して経済的には豊かとはいえない県や地域であるにも関わらず、人びとは、人と多くを交換、共有することを恐れていない。そこには、人への強い信頼があるのである。

最後に、この場を借りて、調査・研究に快く協力して下さった、沖縄本島と宮古島の数えきれない方々へ、厚く感謝申し上げます。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

(1) 平野(野元)美佐「親睦模合と相互扶助: 沖縄・那覇周辺地域における模合の事例から」『生活学論叢』26号、査読有、2015、3-16頁

〔学会発表〕(計 4 件)

(1) 平野(野元)美佐「子どもの祝いにみる宮古島の社会と変化」宮古島現地報告会、2018、宮古島市 NPO 法人あらた

(2) 平野(野元)美佐「宮古島市の祝儀における交換: 子どものお祝いをめぐって」沖縄文化協会 2017 年度第 2 回東京公開研究発表会、2017、法政大学

(3) Hirano-Nomoto Misa “The Development of the Culture of Celebration in Miyako Island, Okinawa: A Study on Children’s Celebration” (宮古島における祝儀文化の展開: 子供に関する祝いを事例に) Anthropology of Japan in Japan Spring Workshop 2017、2017、大阪学院大学

(4) Hirano-Nomoto Misa “What Positionality Changes Led Me To: From Cameroonian Tontine to Okinawan *Moai*.” IUAES (The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) Inter-Congress、2016、Hotel Dubrovnik Palace (Croatia)

〔図書〕(計 1 件)

(1) 平野(野元)美佐「アソシエーション」、国立民族学博物館(編)『世界民族百科事典』丸善、2014、560-561頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平野(野元)美佐 (HIRANO-NOMOTO MISA)
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科・准教授
研究者番号: 40402383

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()